



茶と民族の交差点

大理

【写真】

東昇



雲南省の省都 昆明の駅を出た夜行列車はほんのしばらく平らな土地を走り、やがてゆるゆると傾斜を上り始めた。列車の進行方向左手に昇った十五夜の満月の光が、高原の澄みきった空気を貫いて周囲の山々をくつきりと照らします。

コンパクトメントに備えられた陶磁器のカップに、直径2センチほどの開きかかった松茸の笠のような形の沱茶トウチャと呼ばれる固形の茶を入れる。魔法瓶からお湯を注ぐと塊はしだいにほぐれ濃い山吹色のお茶が染み出しはじめた。表面に浮いてきた茶葉をフーと息を吹きかけてカップの反対側

に移動させたところまでひと口飲む。このような急須も茶漉しも使わな淹れの方が、中国ではむしろ一般的といえる。茶葉を飲み込まないように茶だけをすすめるのはちょっとコツがいるが、慣ればこれほど楽なものはなく、私などは急須を使うのがおつくうになつてしまい、日頃もっぱらこのやり方で

お茶を楽しんでいる。安物のお茶は荒削りではあったが、自然な甘さがあったそれなりにおいしかった。私が駅の売店で買った沱茶は近年になつて作られた小沱茶と呼ばれるおみやげ用のもので、一般には直径10センチぐらいのものが最も多く見られる。標準サイズのもはもちろん丸のままは使わず、少しずつ削つては淹れる。交通の便が悪い雲南省では、各地への輸送に便利なように円盤状の餅茶やレンガ状の磚茶など、さまざまな形状の圧縮された固形のお茶が作られてきた。なかでもお椀型の沱茶は、これから向かう大理州大理州の下関で作られたのが最初だといわれる。現在でも下関には大理州の茶葉だけでなく、雲南省各地から茶が集められ、蒸気で成型されて沱茶が作られている。

高度が高くなるにつれて吹き込む隙間風が冷たさを増してきたため、窓を閉め、蒲団をかぶつて横になる。

南詔国の古都へ

目を覚ますと汽車はすでに終点である大理州の中心都市、下関の近くまで来ていた。時刻はすでに6時を過ぎていたが、北京時間を採用しているため実際には5時前の暗さだ。

下関でバスに乗り換え、かつて500年以上にわたつてこの地に栄えた南詔国南詔国(西暦738年〜1258年)の首都だった大理古城へ向かう。この頃ようやく右手に広がる淡水湖、洱海を茜色に染めながら朝日が昇り始めた。道路から湖側にはちょうど田植えの始まったばかりの水田が、山側には緑の野菜畑が広がり、朝の早い農民たちがすでに野良仕事を始めていた。そして畑の向こうには蒼山山脈の雄渾たる峰々がそびえ立っていた。

バスを降りてから古城内の旅館まで歩く。目抜き通りは歩行者天国になっているので一般車両は入ることができないからだ。南門の楼閣の黄色い屋根瓦、特産の大理石をふんだんに使った立派な門構えの家々、蘭を筆頭にさまざまな花が並ぶ露天の花屋。そして朝露に湿つて輝く石畳の道を色鮮やかな民族衣装に身を包んだ人々がゆつたりと行き交う。

三月街のにぎわい

突然街路に銅鑼の音が響きわたる。振り返ると白族の娘たちの龍踊りが始まった。旧暦3月15日から7日にわたつて開かれる三月街の催しのひとつだ。今日は三月街の第一日目だった。

三月街は唐代に観音を祀る観音廟会として始まったものが、明の時代に入つて祭りにあわせて開かれていた交易市の方が主役になり、競馬なども行われるようになる。三月街の名で呼ばれるようになったのは中華民国以降のことだ。落ち着いた雰囲気の大古城も三月街の期間だけは各地からつめかけた大勢の人々でこつた返す。ふだん古城内では白族や回族以外の少数民族はたまに見かける程度だが、この日ばかりはチベット族、彝族、納西族などの人々にあちこちで出会う。ありとあらゆる商品を売る無数の露店が玉洱道の両側に並んでいるが、古城から山側に離れるにしたがつて家畜や漢方薬など伝統的な商品を扱う店が増え、商人たちの風体もなにやら変わってくる。蒼山の麓の家畜市の近くまで来るとチベット人はばかりが目立つようになるのだ。彼らが商つるのは主に漢方薬の類と馬である。かつてはチベットから



絞り染めがあちこちで売られている

運ばれた馬と雲南のお茶がここで物々交換され、交換されたお茶は遠くチベットへと運ばれた。それゆえ交易に使われた道は茶馬古道と呼ばれるようになった。

チベット族の商人たちはテント生活をしているが、これらテントは店舗でもある。多くは家族全員で移動して来ているようだ。テントの前でタバコをふかすチベット族らしい老人にどこから来たのか問うが、老人は耳が遠いのか、あるいは漢語がわからないのか、きよとんとしている。かたわらの若者の助けでようやく問いの意味がわかったらしく、にこりとして蒼山の方を指差した。老人の指差した先が目の前にそびえる峰なのか、山の向こう側なのか、あるいは遙かチベット高原なのかは想像するほかなかった。

歓迎の茶は苦く

炭火の上へのせた小さな素焼きの壺のなかに緑茶をひとつまみ放り込み、焦げないように壺を絶えず揺すりながら緑のお茶が褐色になるまで煎じたところで、別に沸かしておいた薬缶のお湯を壺の中に注ぎ込む。ジューという音とともに白い花が咲いたように泡が噴きだして壺の外にこぼれた。壺に

残った褐色のお茶が注がれた湯のみから香ばしい臭いが立ち昇る。

「苦い」。それは思わず顔をしかめてしまふほどの苦さだった。これが白族が客人をもてなす際にたてる三道茶（3種類ののお茶）の第一のお茶、通称「苦茶」と呼ばれるものである。ただ不思議なことに後味はとてまさっぱりしている。

次は湯のみの中にあらかじめ胡桃の薄片、紅糖、半精製状態の砂糖を入れておき、これに一道と同じように淹れた苦茶を注ぐ。これが通称「甜茶」と呼ばれる二道茶。甘いお茶漬けとでもいおうか、デザートでも食べているような感じだ。二道には乾燥ミルク、乳扇リヤンを刻んで入れる場合も多い。

三道は湯のみに蜂蜜と山椒の実を淹れたものに、やはり苦い茶をそそぐ。

甘さと辛さと苦みが入り乱れて複雑怪奇な味。三道目の茶は後味が長く残ることから回味茶ともいわれる。三道茶は白族が客人をもてなす際に淹れるお茶だが、こうでなくてはならないという堅苦しい作法は無く、各自各用に自由に淹れているようだ。最近では二道で済ませることも多いそうなので、これこそ時代の流れだろう。

三道茶についての著書がある楊老人は、三道茶は人生の教訓なのだという。



三月街のにぎわい

お茶の里帰り

老いぼれた馬がよろよろと蒼山の急

最初に苦勞をすれば、やがてその努力が報われて甘い生活が送れるようになる。やがて歳をとれば、それまでの人生の甘さも苦きも、よき思い出として去来するようになるのだと。

「わしはもう回味の段階じゃ」。そういつて訳もなく笑った楊老人の齒の半分は抜けていた。後になって、楊じいさんがインテリであったがために文革時代に随分と辛酸をなめたという話を人伝に聞いた。

勾配を上って行く。この辺りの標高は2300メートルを越え、空気が薄く息苦しい。清水の流れ出すところで馬に水を飲ませてひと息つかせる。眼下に洱海と大理の街が一望できた。周囲に広がる茶畑では茶摘みの女たちが忙しく手を動かしている。聴こえて来た茶摘歌は地元民謡などではなく、香港のアイドル歌手が歌う最新のヒット曲だった。茶畑の真ん中にある白壁の民家を改築した製茶工場を訪ねる。お茶を焙煎するときにくべる石炭の臭いがあたりに満ち、ちょうど背中竹籠をお茶で一杯にした女たちが畑からもどってきたところで、たいそくにぎや



チベット族と白族の交易

【上】沱茶の大きさはさまざま
 【下】三道茶。左から苦茶、甜茶、回味茶





中和峰からの眺め

かだった。炎天下に茶を摘む過酷な労働の報酬は、1日当り10人民元(約150円)にも満たないという。それでも彼女たちの表情に暗さはなく、誰かが冗談をいうたびにぐっぐくたかない笑い声が響く。女工歴史的に彼女たちをこらえるのは、あるいは勝手な思い込みかもしれない。

茶園の経営者は台湾人。台湾では茶の栽培に適した土地はすでに開墾し尽くされてしまっているし、人件費も高い。そんな台湾に見切りをつけ、海外で烏龍茶栽培に適した場所を探すうちに、緯度も標高も台湾の高級烏龍茶の産地とほぼ同じ大理近郊に目をつけたのだという。海拔が高い所で栽培された茶は高山茶と呼ばれる。山岳地帯の厳しい気候に鍛えられて葉が厚くなり、平地のものより養分を多く蓄えるようになるので甘さと香りが増す。海拔が2000メートルを越える場所で作られた高山茶は特に珍重され、出来栄えのよいものには玉露など足元にも及ばぬほどの信じられないような高値がつく。ここ以外にもすでにいくつかの茶農園が台湾人の手によって営まれているという。

今日摘まれて来たのは金萱という烏龍茶の一種で、大陸から台湾にわたった茶樹が品種改良されて生まれたもの。

の。台湾初のオリジナル品種といえるため、台湾では本省第一代(省内一代目)とも呼ばれる。その台湾育ちのお茶が今再び大陸にもどって来たわけである。この茶は中国の大都市や台湾そして中国茶愛好家が増えつつある日本市場へと送られる。

台湾から中国大陸へと里帰りしたお茶が今や蒼山の峰にしっかりと根付いている。茶園の主人が山の湧き水で淹れたお茶をこちそうになる。その澄んだ黄金色の茶を口に含むと、ほのかに蜜の香りがした。



見どころ

南門

大理古城の南の城門。楼閣からは古城全体が見渡せる。かつてはほぼ正方形に6キロの城壁が巡らされていた。現在の城壁は近年復元されたもので、城壁の上を散歩できる。入場料2元。

三塔寺(崇聖寺三塔)

古城の西北約1キロに建つ三つの塔は大理のシンボリック的存在。塔以外は近年建設されたもので、入場料32元を払ってまで見る価値があるかは疑問。塔は付近の三塔倒影公園(入園料4元)からながめる方をお勧め。

大理市博物館

復興路の南門近く。清朝に反乱を起こした杜文秀が本部を置いた所。庭には元、明、清朝時代の120以上の石碑が並ぶ。

大理への行き方

雲南省の省都、昆明を経由するのが一般的。下関への飛行機は雲南航空などの便が頻繁に出ている。昆明から約30分。運賃340元。

列車は現在のところ夜行のみ。車両は新しいが、一等寝台でもコンパートメントはあまり広くない。一等寝台(下段)160元。所要約8時間。

下関行きのバスは昆明のあちこちから頻繁に出ているが、直接大理古城まで行くバスは少ない。下関までの運賃は車両の種類によって40元~110元とさまざま。所要4~6時間。

大理での移動

古城内では十分歩いて回れるが、タクシーに乗る場合は交渉制。古城内の移動は5元程度。飛行場から下関市内へは30元、大理古城へは50~60元ぐらいが相場。村々への移動はミニバスが便利。月曜にバザールが開かれる沙坪へは約1時間ほどで、運賃5元。

宿泊について

亜星飯店 / asia star hotel

大理古城エリア唯一の高級ホテル。中華料理レストラン「吟龍亭」では白族による伝統音楽の演奏が聴ける。ビジネスセンター、会議室、ジム、テニスコート、ナイトクラブなどもある。ツイン900元より。大理古城旅遊渡假区、電話:+86-872-2679999

四季客棧 / old dali inn

古城内にある庶民的な宿。建物は三合院造り。レストランの集中する洋人街にも近くて便利。ツイン125元より。大理古城博愛路55号、電話:+86-872-2670382

MCA hotel

南門から城外へ出て150メートルほど。広い庭と小さなプールがある。経営者の光敏さんは知られた画家で、世界各地で作品が展示されている。ホテル内にミニギャラリーあり。ツイン120元より。大理古城文献路、電話:+86-872-2673666

食事について

山菜や高原野菜がおいしい。新鮮な淡水魚も楽しめる。味付けは全般的に塩辛く、トウガラシを使った料理も多い。下関には高級店も多いが、古城内にあるのは家庭的な店がほとんど。洋人街のレストランは西洋料理を出すところが多いが、味はどこか中華風。

杏花村飯店

古城では有名な老舗だが大衆的。砂鍋魚(鮒か鯉の鍋)が人気。大理古城玉洱路165号、電話:+86-872-2670087



南門



三塔寺



大理市博物館



洱海



亜星飯店